

ロジェ・ド・ピールの肖像画論と「扮装肖像画」について

早稲田大学 村山 雄紀

本発表はロジェ・ド・ピールの絵画論を中心として、17世紀後半から18世紀のフランスにおいて勃興した「扮装肖像画 (Le portrait historié)」について分析するものである。

周知のように、絵画における諸ジャンルのうち、歴史画を最高位に位置づけていた王立絵画彫刻アカデミー (以下、アカデミー) において、肖像画は歴史と寓話を対象としないために相対的に軽視されていた。しかしながら、アカデミーの理論的な指針とは裏腹に、肖像画の制作数は歴史画の数を凌駕しており、アカデミーが評価していた肖像画にはしばしば、「扮装した (historié)」の形容が付加されていた。「扮装肖像画 (Le portrait historié)」と呼ばれたこの肖像画は、神話、文学、歴史の登場人物に「扮装」させたモデルを描いたものであり、いわば、肖像画を「歴史化=装飾化」したものである。歴史画を絶対視するアカデミーに肖像画家が認められるためには、歴史画の手法を取り入れ、肖像画を「歴史化=装飾化」することが不可欠だったのである。ピエール・ミニャール、ニコラ・ド・ラルジリエール、フランソワ・ド・トロワ、イアサント・リゴーなどは、歴史画と肖像画のハイブリットなジャンルである「扮装肖像画」の手法に通暁しており、この時代の最も著名な肖像画家の一人となった。

本発表は、このような「扮装肖像画」の擡頭とド・ピールの肖像画論との接続を試みるものである。先行研究には、当該時代における肖像画の隆盛について分析した文献 (Edouard Pommier, *Théories du portrait de la Renaissance aux Lumières*, 1988 ; Emmanuel Coquery (dir), *Visages du Grand Siècle*, 1997) はあるものの、「扮装肖像画」に焦点を当てたものは少なかった。その中でも、マーレン・シュナイダーの研究 (Marlen Schneider, *Belle comme Vénus*, 2020) は「扮装肖像画」の潮流を明らかにした画期的な成果ではあるが、そこではド・ピールをはじめとする理論的言説との関係が明確にされてはおらず、具体的な「扮装肖像画」の作品とド・ピールの理論とのつながりが不明瞭のままだった。そこで本発表では、ド・ピールの肖像画論における「衣装 (le costume)」と「化粧 (le fard)」の概念に着目することにより、ピエール・ミニャールをはじめとする「扮装肖像画」とド・ピールの理論との関係性を明らかにする。ド・ピールの肖像画論における「衣装」と「化粧」の問題系について分析することにより、当該時代における「扮装肖像画」の隆盛を理論的言説と作品分析の双方から明確にすることが、本発表の目的である。